

佳作

「100歳時代を生きる」

—わたしたちを繋ぐ思い出—

愛知県立半田商業高等学校 三年

小 黒 ほのか

綺麗だと思った。透き通った白い肌には薄く化粧が施されている。不思議と悲しさはなかった。ただただ目の前の不気味なほど静かな美しさに目を奪われていた。

曾祖母が死んだ。

きっともう何十年も生きて、110歳、もしかしたら120歳まで生きるのだろうかとぼんやり思っていたせいか、その事実を受け入れるのには時間がかかった。今までどこか遠く感じていた「死」という概念を、初めて身近に感じた瞬間だった。

介護施設に入居していた曾祖母に会うことは少なかった。部活動で忙しかったこともあるが、会いに行くたびお小遣いをくれる曾祖母に、それが目的だと思われているのが悲しかったのもある。それでも、部活のない日には顔を出した。はじめは苦手に思っていた施設独特のにおいにも慣れてき

た頃、曾祖母が危篤だと知らされた。もう100歳手前で、さすがに厳しいだろうと家族全員でお見舞いに行った。皆が思い思いの話をしている中で、曾祖母になんて声をかけようと思ふと気が付いた。話のタネになるような思い出も無ければ、好きなものや趣味さえ知らなかったのだ。結局、当たり障りのないことを一言二言だけ残してスマートフォン真っ黒いだけの画面を見つめた。

思い出と懐かしむには淡泊な気もするが、曾祖母に教わったことは不思議と今でも覚えていて。言葉については特に影響が大きい。

「お先にご無礼いたしました。」

こんな言葉を幼稚園児が言っている姿が想像できるだろうか。もちろん言葉の意味を理解しているはずもなく、ただお風呂から上がった時に言うだけで認識していたものだが、当時は当たり前のように使っていたが、今思い返してみればちょっと大げさな気もする。皆が「パパ」と呼ぶ中で「お父さん」と言うには抵抗があったし、「つきさじ」が伝わらないと分かればすぐに「フォーク」と覚え直した。友達と違うのが嫌という子供特有の感情もあったが、他の子と比べ私だけ生きている時代が違うような、古く年老いた感じが受け入れられなかった。曾祖母が施設へ移動してからは次第にそれら

の言葉も使わなくなり、きつと、これから誰に使われることもないだろうと思う。

しかし、高校3年生となった今ではその考えが変わってきた。次々と新しい技術が生まれるこの時代に本当に必要なものは、今まで私が見向きもしなかった「日本らしさ」なのではないかと思うようになったのだ。

礼儀正しく、親切で忍耐力がある。きつと世界では多くの日本人がそのように評価されるだろう。この国民性というのは決して短期的なものではなく、何百年、何千年と受け継がれてきたものなのだ。だからこそ、目先の利益を追求したり真新しいことばかりに目を向けたりするのではなく、一度立ち止まって先人の知恵を借りることも大切だと思う。

私の中の古き良き日本は、やはり曾祖母だ。いつだって快活に親切に他人のために尽くしていた曾祖母を今でも尊敬している。だからこそ、私の知らない暮らしを、知識を教えてください。もつと話をしたかったと後悔した。

「千羽鶴、一緒に折ってみない。」

まだ幼かった頃、曾祖母にそう誘われたことがある。曾祖母は毎月近くの小さなお社に千羽鶴を納めていた。何故なのか、確かに聞いた記憶はあるのに思い出せないのがもどかしい。鶴の折り方も忘れてしまった曾祖母の代わりに折り鶴を

納めていた祖母も、今は寝たきりが多い。お見舞いに行ったら折、四人部屋に一人寂しく寝ていた曾祖母の姿が重なった。

祖母はきつと、曾祖母との思い出の中で多くのことを受け継いだだろう。その反対に私は、思い出として多くのことを忘れてしまっているだろう。けれども、確かに私が伝えなければいけない。親から子へと受け渡される形のないバトンを、私も次の世代へ繋いでいかなければいけないのだ。

曾祖母が亡くなった日を思い出すと、同時にその使命も私の心の穴を埋めるようにじんわりと蘇ってくる。すでに魂など無いはずなのに、にこりと笑みを浮かべていた曾祖母。生きていた頃よりずっと美しいそのかんばせが悲しい。

曾祖母のいない毎日は、けれども変哲のない日常で、性懲りもなく「思い出」に成り下がってしまっただった。私と曾祖母が同じ年になるまで、あと83年。医療の進歩によつては、もしかしたら曾祖母よりももつと長生きをするかもしれない。そんな長い時を過ごす中で、当たり前前にあった暮らしを次代へ伝えたい。

託された思い出を、今度はわたしたちが。

わたしたちが、未来へと繋ぐ。